

## 参 考 図 書 紹 介

### 新養蜂完全ガイド

The New Complete Guide to Beekeeping. The Countryman Press, Inc. pp. 207. 1994. \$15.00. ISBN 0-88150-315-0

北アメリカ、コーネル大学のモース教授は50年以上ミツバチの研究に携わってきており、ミツバチ関係の著書も多数ある養蜂研究者の第一人者である。その彼が1994年に出版したこの本は、これから養蜂を始めようとする人にも、すでに養蜂経験のある人にも役立つ養蜂の手引き書である。やさしい英語で書かれており、英語が少々できる人には読みやすく、また、写真や図版も60枚以上入っており英語が苦手な人にも理解しやすい本である。

現在北米では、10万人以上の養蜂家があり、その内の90%の人が1~15群のいわゆる趣味

の養蜂家で、他に1,500人の専門家の中には6万群を飼育している人もいて、北米の養蜂の底辺の広さと規模の大きさが伺える。この本はいかにハチミツと蜂ろうを採集するかを基本に書かれているが、花粉媒介等にも触れており、多くの作物の花粉媒介にはミツバチが一番適しており、北米の1/3の蜂群の百万群以上が毎年これに使われているようで、衰退する日本の養蜂界に希望が持てる内容となっている。

蜂病は、蜂のストレスに起因することも多く、養蜂技術対策の他、ミツバチが自然生態の中でいかに蜂病と戦っているかの記述がおもしろい。末尾には養蜂に関する研究機関や用語解説も載っており、きめ細かな仕上がりとなっている良書であり一読をお勧めする。(下鳥大作)

### スリランカにおけるハチミツ生産のための養蜂

Punchihewa, R. W. K. : Beekeeping for Honey Production in Sri Lanka; Management of Asiatic Hive Honeybee *Apis cerana* in its Natural Tropical Monsoonal Environment. Sri Lanka Dep. Agric., Peradeniya, Sri Lanka in association with Canadian Inter. Develop. Agency, Quebec Canada. pp. 232. 1994. ISBN 955-9282-01-8

熱帯モンスーン環境下でのトウヨウミツバチの管理をもとに、スリランカでのハチミツ生産を目的とした養蜂について、スリランカ農業省のプンチヘワ博士が彼の実際的な技術や経験、知識を余さず出しているトウヨウミツバチ養蜂に関する待望久しい好著である。

本誌は最初にトウヨウミツバチの生物学を最新の研究を交えて説明している。続く各章ではミツバチを効率よく管理するための巣箱の改良点、強群に保つための蜂群の管理法、分蜂の調

節や分蜂群の管理など、トウヨウミツバチをどのようにして満足いくかたちで管理、運営したらよいかについて、明快な解説がされている。筆者は何年間にもわたる思考錯誤の結果、下段の育児巣箱にはトップバー式の巣枠を用い、その上の貯蜜用継箱は巣礎を使った巣板で採蜜するのが最も効率的な方法として紹介している。100枚以上のカラー写真や分かりやすい図による解説は、実際の管理に大いに役立つ点が多い。ただ、引用文献が著者に関連のあるものだけなのがいかにも惜しいと感じる。序言でフランクフルト大学のケーニガー博士夫妻は、在来のミツバチによるハチミツ生産とその管理のために本誌は大いに寄与するに違いないと結論しているように、アジア地域でトウヨウミツバチを用いた養蜂を展開する上での貴重な一冊である。(吉田忠晴)

## 参 考 図 書 紹 介

### 花粉学事典

日本花粉学会：花粉学事典. 朝倉書店. pp.32+454. 1994. 14,420 円. ISBN 4-254-17088-2

以前は限られた分野での対象物であった花粉も、近年国内でも新聞紙上や一般社会でも花粉症や食品関連などの広がりとともに関心が高まってきている。これに伴い関連の出版物も年々増加しているが、花粉の研究分野が地質、植物、医学、食品などの多岐の方面に関連していることもあって、本書の序文で三木壽子先生や高橋清先生が触れているが、用語の表現や意味の捉え方が人によっても違いがあったり、各分野の専門用語を使用していることが多く、他分野の専門用語が判らないことも一部ではあり、今回、花粉学会の各専門家が関連の用語を整理して出版された「花粉学事典」は、花粉関連に携わる人々だけでなく、これから利用する人にとっても、大変便利で嬉しくなる一冊である。

本書は花粉学会の各分野の専門家 60 名が執筆を担当して、3 部で構成されているが、主体となっているのは用語解説で、1,300 の項目について五十音順に英文を記して解説を行っている。解説文も重要なものは文章も長く取っており、十分とは言えないが必要に応じて図表、写真を取り入れてあり朝倉書店の事典シリーズの特徴でもあるが、読み易さと使いよさが感じられる。

用語以外に、付録と言って良いか判らないが、巻頭部に 32 頁の「写真でみるパリノロジー」として代表的な花粉写真、花粉の発生、空中花粉採集器、人工授粉などの写真と解説があり、巻末には約 60 頁の花分析資料、分類・形態区分、空中花粉関係資料などが収められていて、入門書としては足りないが、部分的には解説書としても応用できる一冊かもしれない。

(杉本和永)

### レンゲの集大成

安江多輔：レンゲ全書 (来歴・性状・栽培・利用・文化). 農文協. pp.239. 1993. 4,200 円. ISBN 4-540-93006-0

明治から大正・昭和にかけて水田裏作緑肥作物として、わが国の稲作農業に大きく貢献してきたレンゲは、化学肥料の普及や早期米の普及などにより、1960 年頃から急速に栽培面積が減少したが、最近レンゲの効果が見直され、再び増加の傾向がある。この見直されたレンゲの全てを再発見するにふさわしい一冊である。

子供の頃から慣れ親しんだレンゲは、中国原産で日本に仏教をもたらした鑑真大和尚が、わが国に伝えたといわれるほど、古くから日本人の文化、生活に親しまれている。

しかしその栽培は中国と日本および韓国のみ限定されているという。

本書では、緑肥、家畜の飼料また忘れてなら

ない優秀な蜜源としての価値あるレンゲを 1 から 10 までを事細かに紹介している。

第 1 章および第 2 章ではレンゲの起源と伝播およびレンゲの植物学的な特性について記述、第 3 章から第 5 章では、日本および中国の栽培と利用方法の実際および東アジア以外の国におけるレンゲの導入と研究が述べられている。第 6 章から第 7 章ではレンゲの最も重要な、根粒菌と窒素固定、肥効と地力増進効果について述べられている。第 8 章では蜜源としてのレンゲ、レンゲハチミツの特性について、そして第 9 章と第 10 章では、人間生活に関わるレンゲについて記述されている。

日頃何気なく見て、そして味わっているレンゲの全てが再発見できる本書。是非一読あれ。

(水野宗衛)